
生徒会の切札

1-1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の切札

【Nコード】

N7443Z

【作者名】

1 - 1

【あらすじ】

碧陽学園生徒会…そこには、4人の美少女と1人の美男子(?)がいる。

その中に追加メンバーとして足を踏み入れた2人目の男は文武両道の天才(天災?)でゲーム名人!?

そんなオリ主・豹堂真^{ひょうどうまこと}の織り成すドタバタ劇!

これが処女作なため、誤字・脱字があるかと思いますが、どうかよろしく願います。

存在しないプロローグ（前書き）

とある作者様に感化されて書いてみました。
今回はプロローグのみです。

これからよろしくお願いいたします。
それでは「生徒会の切札」始めていききたいと思います。

存在しないプロローグ

ルール1 神の存在を受け入れる

ルール2 彼らに直接触れてはいけない

ルール3 友達の友達は我ら。それが干渉限界。

ルール4 企業の意向は何よりも優先される

ルール5 スタッフは、個人の思想を持ち込むなかれ

ルール6 情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である

ルール7 我らが騙すのはヒトではなく神であることを忘れてはならない

ルール8 このプロジェクトに道徳心は必要ない。全ては企業の利益のために

ルール9 性質上、学園の保守は最大の命題である

追加ルール 今年の生徒会には気をつける

存在しないプロローグ（後書き）

うーん…プロローグだけでよかったのだろうか…

？「まあいいんじゃない？原作もこんな感じで始まるわけだし。」

そうだよな…ってあんた誰！？

？「あ？俺は…てちよつとまで！何で名前伏字なんだよ！あらずじで名前出てるから出したっていいだろ！？」

えー まだ本編入ってないしー

？「こいつ…」

まあ次回には名前出るかな？次回設定か本編をやるし

？「まあ、それならいいか…」

てなわけでまた次回お会いしましょう それではー

駄弁る生徒会？（前書き）

遅くなりました

このような小説に3件ものお気に入り登録があったこと感謝いたします

それでは生徒会の切札「駄弁る生徒会」始めていききたいと思います

駄弁る生徒会？

「世の中がつまらないんじゃないの。貴方がつまらない人間になったのよっ！」

まどろみの中にあつた俺の意識が、会長のどこかの本の受け売りの様な言葉によつてもどつてくる。

折角気持ちよく寝ていたのに…。でも会長にしてはいい事をいったと働かない頭を使いながら思う。

初めて経験したことも、何度もやっているうちに馴れて新鮮な気持ちを感じなくなるからな。

初めての一本背負い。

初めての面打ち。

初めての瓦割り10枚。

初めての…。って、ここまで武術関連ばかりじゃないか？

あ 自己紹介が遅れたな。

俺の名前は豹堂真^{とらどうまこと}。この碧陽学園生徒会の会長補佐の役職についている。

ちなみにこの物語の語り部で、主人公でもある…。急に俺は何を言い始めたんだ？主人公とかってなんだ？…まあいいか。

さて、そろそろ鍵がへんな事を言つて、会長を慌てさせるころかな？

「じゃ、童貞も悪くないってことですか？」

「「ぶっ！」」「…こいつは…俺の予想をはるかに超えたこと言いやがった…」。

おそろくうちのお子様会長は涙目で杉崎を睨んでいるだろう。何で分かるのかって？経験則だよ うん

「今の私の言葉から、どうしてそんな返しが来るわけ？」

「甘いですね会長。俺の思考回路は基本、まずはそっち方向に直結します！」

「なにを誇らしげに！杉崎はもうちょっと副会長としての自覚をねえ……」

「ありますよ、自覚。この生徒会は俺のハーレムだという自覚なら十分」

「ごめん。副会長の自覚はいいから、そっちの自覚を捨てることから始めようね」

相変わらずだなあこの二人はと思いながら二人を眺める…おっとこの二人の紹介もしないとな。

一人はこの生徒会の会長・桜野さくらのくりむだ。

どこからどう見ても小学生としか思えない容姿・頭脳のスーパーお子様。

よく高校3年まで進学できたものだ　ほんとに

もう一人はこの生徒会の数少ない男子の片割れの杉崎すぎさき鍵。

見た目はかっこいいのに、常日頃からハーレム　ハーレム言っているせいかそこまでもてない二枚目半な男。

まあそれは理由があるからなんだがな　ちなみに俺の親友でもある

「あれ？真起きてたのか？てつきり当分起きることないと思ったんだけど」

「おっす　おはよう　相変わらずだなお前は…会長を口説くんなら後にしてくれ　あとに」

「く　口説くんじゃないわよ！まったく…」

そっいいながら会長はさきほど吹きだしたお茶を、ティッシュで吹

いてそのティッシュを丸めてゴミ箱に投げようとする

てか片目を閉じてまじに狙ってるよこの人…ほんとに子供だなあ…
そう思いながら俺は鞆からP Pを取り出す

今日は何しようかなあ…モン ンでもいいしファンタシー ターで
もいいし…

「かいちよー」

「なによあ」

「好きです。付き合ってください」

「にやわ！」

そんな会長に対して鍵が唐突に告白してティッシュが俺の目の前に
飛んでくる まあどうでもいいや

よし 今日はパワ ロでオールポジション作るまで粘るか とりあ
えず最初はキャッチから…

「なんで杉崎はそんな軽薄に告白できるのよ！」

「本気だからです！」

「嘘だ！」

「『ひ らし』ネタは古いですよ会長…」

「大体杉崎にどこに本気があるのよ…生徒会に初めて顔出した時
のせりふ 覚えてる？」

「えつと…なんでしたっけ？『俺にかまわず先に行け！』でしたっ
け？」

「ちなみに俺は『ナズエミデルンデイス（0W0#）』でしたね
確か」

「しよっぱなからどんな状況よ！それと豹堂！仮面 イダーは電
しか見てないわ！」

まじかよ ブ イドもいい作品だと思っただけだなあ…ネタ抜きで
てか会長も仮面 イダー見てたんだな

「あれ？違いますか？じゃあ…」ただの人間には興味ありません
宇宙人 未来人 「」

「危険よ杉崎！いろんな意味で」

「大丈夫です。原作派ですから」

「何の保障！？あとアニメの出来は神だよ！？」

「…二期はどうして作画がけい ん！っぽかったのか…」

「やめなさい！そこには触れちゃいけないわ！」

ゲームの画面に集中しつつ鍵に便乗して会長を弄る

お！天才きたこれいいとこまでいけるんじゃないわ？！

「皆好きです。超好きです。皆付き合っで。絶対に幸せにしてみせるから。」

鍵がこの生徒会に顔を出した時のせりふを言う まあ俺そんな時いなかったけど

「そうよそれ！まったく…誰でもいいから付き合っでなんて誠実じゃないわ！」

よく言うよ…鍵がそんなせりふを言ったのも こういう考え方をするようになったのも会長のせい というより会長のおかげなのに

「一途なんです！美少女に！」

「括りが大きいわ！」

「希少種ですよー美少女。それによくないですか？最初から「俺は！ハーレムエンドを目指す！」って宣言するの」

「あんたはそこらのギャルゲ主人公とは基本スペックが違いすぎるわ」

「確かに…鍵は主人公の友人のギャグ要員っで方が似合ってるかもな。まあ俺もだろうけど」

「おい真！お前はなんでよくちよくしか喋らないの！？そして俺

の親友だよな?!なんでそんな俺に厳しいんだよ!」

「厳しい?俺はただ単に事実を述べただけだけど?」

「そ・そうよ!豹堂の言うとおりよ!」

鍵が「顔はいいのにー!」とか言っているが無視無視

若干涙目になりながら鍵は俺の前にあつた会長の捨てそこなつたデ
イッシュをゴミ箱に投げ入れる

「杉崎つてさ さりげないところで優しいわよね…無意識に」

「え?…こういうギャップって好感度上がるでしょ?」

「狙い!?しまった!あたしの中の杉崎への好感度は若干上昇して
しまったわ!?!」

この二人はほんとに仲いいなあ こんなに騒いで…つて!

「うああああああああああ 炎上したあああああああああ
あ」

「急にどうした!?!」

うつ…畜生…またこいつ炎上しやがったよ…やべ まじで涙出てき
た…

そんなこと思いつながらゲームを終了して別のゲームに入れ替えてい
ると生徒会室の扉が開いた

「キー君 アカちゃんをいじめないの そしてニュー君…大丈夫?
廊下中に声が響いてたけど…」

この人は紅葉知弦さん あかは ちづる 俺の先輩でおさま会長とは違い出るとこ
は出てる綺麗な先輩だ

クールビューティーという言葉があう人だほんとこの二人が親友

って信じられないな…

ちなみにニユー君って言うのは俺のあだ名だ

真 しん 新 new ニュー

ってな感じのあだ名 まあ個人的にも気に入っている

「やだなあ知弦さん 弄ってるんじゃないかって辱めてるんです」

「心配しないでください知弦先輩…これから別の世界に行くんで」

「余計に悪質よ？それ あとニユー君現実逃避はいいから なんか厨二臭いわ」

グフツ！…じ 実際逃げてる上に俺の趣味的にあってるから反論が出来ない…

「大丈夫です同意の下ですから てか今日集まり悪いですね俺のハーレム」

「ハーレムじゃなくて生徒会ね それにキー君のそういうところ直せないのかしら？」

「ぐ…でもこれが俺ですから！ これが俺のすべてですから」

「つまりお前はその程度の男ってことだな」
あ また鍵が涙目になった 相変わらずこいつ弄りやすいな（S つけ全開）

「まあ 私はキー君のそういうところ 嫌いじゃないけど…少しは改善するべきじゃないのかしら？」

「く で でもこういう人こそ落ちたら激しいにちがいな」

「あ それは正解 私小学校のころに好きな人に1日300通送ったりして最終的に精神崩壊まで追い込んだりしたし…あなたはどうかしら」

ガクガクブルブル そのことを聞いた俺たち三人全員青ざめた顔で知弦先輩を見る…

そんな中鍵が口を開いた

「分かりました…」

「あら それを聞いても私を受け入れてくれるの？ いま私の好感度がぐんと「知弦さんとは 体だけの関係を目指します！」…」

ハア…鍵のアホ…そういうのがあるから三枚目って言われるんだよ」

「お前は今日絶好調ですね！」

あれ？俺声に出してないよね？ あれ？

「声におもいつきし出てましたからね！？なにその「え！？」って顔！」

今日の鍵は精神的にズタボロだな 主におれのせいで

そんな鍵とのやり取りをしているうちに会長がどこからかお菓子を
出して食べようとしていた

「「太りますよ」「 おつと鍵と被った まあ誰しもが思う事だも
んな

「ふ 太らないよ 私太りにくい体質だし」

そう言いながら会長はお菓子を口の中に放り込む

その刹那 知弦先輩と俺はアイコンタクトを交わす

「えつとこの問題は…『メタボリックシンドローム』ね よし正解
つと」

「近年多いですよね メタボな人って この年でメタボって人もち
よくちよくいますからね」

「…」

この会話を聞いた会長が涙目の状態で椅子から崩れ落ちる…その間

に知弦さんとほくそ笑む

そのとき鍵がこっちを見て青ざめてたように見えるけど 気のせいだろう

そして鍵が会長に近づいていく

「会長 心配しないでくださいもし太ったら…」

「え す 杉崎 太って醜くなった私も好きでいてくれるの？」

「その時は… 仕事に生きればいい」「リアルアドバイス?!」

「俺 陰ながら応援しますから! ブログに匿名で励ましのメール送りますから」

「陰からなんだ! 匿名なんだ! 太ったら見捨てるんだ!」

「だから太っちゃ駄目ですよ 太っちゃ」

鍵が笑いかけながら会長にそういうが お前さっさと酷いこと言っ
たよな

まあ それが杉崎鍵って人間なのだろうけどさ

そうこうしているうちにまた生徒会室の扉が開いて残り二人のメン
バーが入ってきた

駄弁る生徒会？（後書き）

どうだ！？

真「長いし読みづらい 出直せ」

グサツ（胸にルガーランスが刺さる）

真「てか 今回で深夏と真冬はでてこないのな」

まあ 自分の執筆が遅いせいで話の進行も遅く…

真「お前のせいだな つまりは んで？ 次回の投稿予定は？」

うーん…年末だから実家にも行かないといけないし それに大掃除

も…

真「まあ こんな駄作者だが気長に待っていてください」

ほんとに申し訳ない それでは次回の駄弁る生徒会？でお会いしましょう

それではー

主人公設定（前書き）

次話の前に主人公の設定をやっておこうかと思えます
すこしネタバレ的な要素が入っております
それでも良いという方はこれから先を読んでください

主人公設定

名前

豹堂 真
ひょうどう まこと
旧姓：芹沢
せりざわ

年齢

16歳

所属

碧陽学園2年B組
壁陽学園生徒会 生徒会長補佐

身長

167cm（ただし外見や武術における威圧感によってそれ以上に見える）

体重

58kg（決して貧弱というわけではなく内に引き締められている）

趣味

PCいじり・ゲーム・読書・体を動かすこと

外見

クォーターであり金髪で目の色が蒼という日本人離れた容姿
目が少し釣りあがっていて怖い印象を受ける
肩まである後ろ髪を一つに束ねている

性格

前述の外見のせいで初対面の相手には大半の場合避けられる
しかしその性格は友好的で友人や彼を慕う後輩も多い
他人に向けられる好意に対しては敏感

だが本人がそのような体験をしたことがないため自分に対する好意には疎い

中学のころはとある事情でかなり荒れていた（しかしその荒れていたおかげで鍵と知り合った）

そのため中学時代の一部の生徒にはかなり避けられている

備考

もともとこちらの地方の出身ではなく前述の事情で中学入学前のころにこちらに越して来た

現在祖父との二人暮らしで、祖父の経営する道場の師範代補佐として過ごしている

ゲームが大好きで、杉崎と深夏曰く「真冬並みのゲーム廃人」
運動神経もよく、深夏と同じく部活の助っ人によく呼ばれる
近辺の不良がすぐ頭を下げるほど喧嘩も強いらしい

杉崎は中学からの知り合い、会長・知弦・深夏は高校1年からの知り合う

真冬とはネット上では過去に何度もあっていたが、現実では真冬が入学前に一度あった程度

主人公設定（後書き）

今回は本家の主人公 杉崎鍵の登場です

鍵「何で今回は俺？」

いや 真には見せないほうがいいかなあ と個人的に思ってた

鍵「へー とりあえず聞きたいんだけど…」

はいはい 为什么呢？

鍵「真のプロファイルの”旧姓”っていったいなんなんだ？」

あー…そこは後々明らかになる予定だからいまはスルーで

鍵「なんだそれ？」

まあ 真にも悲しい過去があるってことだよ

鍵「まあ 本人から聞いたほうが手っ取り早いもんな」

そだね てことで今回は設定のみですいませんでした

次話もなるべく早く書き上げますので 今後ともよろしくお願いします

それではー

駄弁る生徒会？（前書き）

今回は駄文の上に詰め込みすぎたためにちょっと長いです
そして今回真冬のフラグを若干立てようかと思っています
今年最後の投稿です

それでは駄弁る生徒会？ 始めて行きたいと思います

あ あとお気に入りが入りが10件行っていました
本当にありがとうございます

駄弁る生徒会？

「うーっす」「おそくなりましたー」

対照的な掛け声で二人の美少女が生徒会室に入ってくる

うーっす と気の抜けたような挨拶をしながら入ってきたのは椎^しいな^{みなつ}名深夏

俺や鍵と同じ2年B組の所属で 生徒会副会長の役職についている
スポーツが得意…というより好きでよく（俺も一緒にだが）部活の
助っ人に行っていたりする
碧陽に入学してから時々スポーツなんかで俺と勝負とかもしてる…
勝率？五分五分だよ

深夏に隠れるように入ってきたのはこの生徒会メンバー唯一の1年生 椎^{しいな}名真冬^{まふゆ}だ

深夏とは対照的に白い肌と色素の抜けたような髪のおとなしい印象
をもつ女の子だ

深夏の影響なのか分からないが男が苦手らしい 大丈夫かな俺…
ちなみにこの子とは昨日初めてあったためにいまいちどんな子なの
か把握していない

でも鍵と深夏曰く「お前と同類」だそうだ…同類ってどういう意味
だろう？

「お？真冬ちゃん 鞆のストラップ変えた？」

「え あ はい でもよく分かりましたね」

「大丈夫！ 真冬ちゃんのことは何でも把握しているつもりだから
！」

「あ ありがとうございます…」

おい鍵 真冬ちゃんひいてるぞ そんなことしてると後ろから…
ガチッ！ 深夏が鍵にヘッドロックをかける あーあ…俺知ーらね
っと

「おい鍵！ あたしの目の前で真冬を口説くんじゃねーよ！」

「うう… ギブギブ… ちょ 見捨てないで 真！ 助けて！ いやま
じで！」

はあ… まったくしょうがねーな…

「深夏 そこらへんにしとけ… 流石にそれはまずいぞ」

「ちえー」と言いながら深夏はヘッドロックをといていく

「ま 真 ありがとう たすか」そういうのは俺がやってやるって
おい！裏切ったなまこ…」

そう言いながら今度は俺が鍵にヘッドロックをかける
鍵が俺の手を叩いてギブって言っているがこの際無視

「でもお前さつき深夏が技をといた瞬間に若干残念そうな顔したよ
な… まさか」

「え！？ ご 誤解だつて！ っておい深夏！ 右手を振りかぶ
グングル！』ゴハッ！」

グチャ！

鍵の顔辺りから聞こえてはいけない音が聞こえた気がする
力を緩めると鍵が力なく崩れる…

その上深夏の右手が赤く染まってなんかないぞ… み 見えないって
言ってるだろ！

そう思いながら俺は自分の定位置である場所に座る ちなみに俺の
座っている位置は

会

	深	鍵	
—	—	—	—
	— 真	— 知	
—	—	—	—

俺

という感じだ 俺は深夏と真冬ちゃんの間座っているという感じになる

真ん中の円は何かって？ 会長の大好きなお菓子「しつと チョコ」だ ちなみに俺も大好きだ

「あの…」

「ん？ どうしたの真冬ちゃん？」

俺の右隣に座っている真冬ちゃんがオズオズと俺に対して話しかけてくる

よかった…昨日の顔合わせの時の第一印象最悪だったからなあ…

「あの…豹堂先輩が「真」え？」

「真でいいよ 呼び方 そんな硬っ 苦しい呼び方は苦手だから」

「でも…」

「うーん じゃあ 『真先輩』でどう？ その方が呼びやすいかな？」

「じゃ じゃあ今度からはその呼び方で…」

よかった…いまいち真冬ちゃんとはコミュニケーションとれるかな 安だったんだよな…

これで一步前進 まずは仲良くすることから始めないとね

「…流石だな真 男が苦手な真冬がまだ2回しか会ってない男のと名前で呼ぶなんて…」

「ん？ そうか？ まあ俺きっかけで男に対する苦手意識を払拭してくれればいいんだけど」

「いやそういう意味じゃ…まあいいか」

「そそれで真先輩 さっきの続きなんですけど…」

「あ そうだったね それで何を言おうとしたの？」

「はい…真先輩のそれ…」

「言いながら俺のP Pを指差してくる…」

「これ？ いやぁ これからモン ンでもやるうかと「やつぱり！」うお！」

真冬ちゃんがものすごい興奮して顔を近づけ…って！？

近い近い近い！！！！真冬ちゃんの顔が俺の目の前にいいいいいい！！！！（真は異性に対しての免疫は高くないですby作者）

「真冬もやってるんですよ！モン ン！」

「そ そうなんだ…」やばい 多分俺の顔真っ赤だ

「はい！ でも周りでモン ン…というより趣味の合う友達がいなくて…」

だから！ と言いながらさらに顔を近づけてくる やばいやばいやばい！！触れる触れる触れる！！

と思った瞬間に急に真冬ちゃんが離れる 助かった…でも何で？ よく見ると知弦先輩が真冬ちゃんの肩を掴んで椅子に座らせていた

「こら真冬ちゃん ニュー君が困ってるでしょ（ま まずったわまさか真冬ちゃんがこんな大胆な行動に出るなんて…）」

「で でも真冬！ 真先輩とゲームの話を「するために顔をあんな

に近づけるの?」: ! / / /」

真冬ちゃんが真っ赤な顔をしてこっちを見てくる

思わず顔を背けたけど多分いま俺の顔も真っ赤だと思う

コホン と可愛いらしい声で仕切りなおす真冬ちゃん

「ほ 本題なんですけど もしよかったらで良いんですけど 真冬と一緒に一狩りいきませんか?」

「え!? あ ああ 俺で良かったらいつでも良いよ」

「ありがとうございます!」

というわけで 真冬ちゃんとモン ンをすることになった…会議は?

鍵 side

「いつつ…」

さつき深夏に受けた攻撃で刈り取られた意識が戻ってくる

てか 真も真だよ…なにもそんなこと言わなくても…

まあ 確かに俺も悪いんだけどさ…それを言うのはやめてほしいよ

とりあえず体を起こして自分の定位置に座る

そしてさつきの事を言おうと真の方を見ると

「よっしゃ部位破壊! 真冬ちゃん! 援護よろしく!」

「はい! その間に真先輩は回復してきておいってください!」

「了解!」

真冬ちゃんと一緒にモン ンをやっていた

…え? 真って真冬ちゃんと昨日会ったばかりだよな?

それなのにもう名前で呼ばれてる…なんか悔しいな

「お 鍵起きたのか」

「あ ああ にしても俺が気絶している間に何があったんだ？」

「まあ…真のいつもの奴だよ」

納得した あいつのフレンドリーさは異常だからな

この前なんかゲーセンで対戦した初対面の相手と気づいたらメアドとか交換してたし

そんで同類である真冬ちゃんとゲームの世界に狩りに出かけたってことが

でも そろそろ会長がご立腹だから会議を仕切り直そうか

s i d e o u t

ところでさ と鍵が深夏と真冬ちゃんに話しかけてくる

ちようどクエストが終わって一息ついていたところだったので真冬ちゃんが応答する

「深夏と真冬ちゃんは『初めてのころはあんなに楽しかったのに』みたいなことってある？」

「なんだよぶからぼくに」

「いや さつき会長が言ってたんだよ『世の中がつまらなくなったんじゃないかって自分がつまらなくなったんだ』って」

「改めて考えても久々にいい言葉だよな 会長の受け売り いったいどこの本に書いてあったんですか？」

「久々とは失礼な！だ 大体 本で見つけた言葉なわけないじゃない！」

会長 こっち向いて目を見て言いなさい

「真冬はお化粧…コスメですかね」

「「化粧？」」今日はよく鍵と言葉が被るなあ

「はい 子供のころはお母さんがお化粧しているの見てて羨ましい
と思つて 中学のころに初めて買った時はすごく嬉しかったんで
す でもいまだと最低限のメイクしかしなくなつて…」

「ああ なるほどね でも大丈夫！ 真冬ちゃんは化粧しなくても
かわいいから！ というより真冬ちゃんの美貌を隠してしまう化粧
なんてないほうがいい！」

「あ ありがとうございます…」

また口説いてるよ…てかほんとにこりねーな鍵は

まあ 確かに化粧が無いほうがその人の本当の姿って感じで嫌いじ
やないけど

「おい鍵！ また真冬を口説いてんじゃねーよ！」

「や やだなあ深夏嫉妬するんじゃないよ お前も魅力的だからさ」

「いやいや 嫉妬じゃねーから…」

「深夏にも結婚したら真冬ちゃんが妹になるという魅力が」

「しかもあたし本人の魅力じゃねえ！」

やばい 今日の鍵絶好調だ どうせ「ヤキモチ焼いててかわいいな
あ」とでも思つてるんだろ

「ヤキモチなんて焼いてねーから！」

「おお！ ついに以心伝心まで！ ゴールインは近いぞ！」

駄目だこいつ 最早手の施しようがない

「怖いよ…そう思い込めるお前が怖いよ…」

「思い込み？ 仕方ない そういうことにしてあげ すいません調子乗りましたその拳を下ろしてください真様」

流石にこれ以上はまずいと思ったので拳を振りかぶって鍵に近づいたら鍵が土下座してきた

土下座するなら最初からすんなつての…

「この光景を見ると 鍵の方が成績良いなんて思えねーよな」

「キー君は優良枠で入ってきたのよね… ニュー君のほうがふさわしいと思うんだけど」

「いやいや 俺なんかが優良枠なんてそんな「終盤2回のテストわざと間違えたくせに」…」

知弦先輩が笑いながら小声で言ってくる

なんでこの人知ってるんだ？ 俺が鍵を生徒会に入れるために”わざと”テストの点数下げたこと

やっぱりこの人だけは敵に回しちゃ駄目だ

「大体この学校の生徒会役員の選抜基準おかしいのよ！ 人気投票や優良枠もそうだけどメンタル面もきちんと評価に加えるべきだわ！」

「俺はこのシステムいいと思いますけどね」

この碧陽学園の生徒会役員の選抜方法は他の学校とは一味違う

他の学校のように選挙などは行われず 純然たる人気投票によって役員が決まる

しかしそれでは流石にまずい ということでの妥協案が先ほど話に出てきた『優良枠』だ

これは学年の成績優秀者が希望すれば生徒会に入れるというもの
今期はその制度を使って鍵が生徒会入りした

「よくよく考えたら　なんで真がここにいるんだ？」

「そういえばそうだよな　俺が折角入学当初かなり低かった成績を
トップまで上げたのに…」

「知らねえよ　一昨日こっちに帰ってきたら急に「お前　今日から
生徒会役員な」って言われたんだよ」

しかも会長補佐って言ういまいち分らない役職でな

「そういえば　何で真先輩はすぐに生徒会に来なかったんですか？
今学期始まって結構たってたのに」

「あー　俺実は3月の中旬くらいからアメリカにホームステイして
たから」

そのためか時差ぼけなんだよなあ…　ようやく眠気がとれた所だよ

「びつくりしたよ　帰ってきたら鍵が生徒会に入ってるんだもんな
まあ予想は出来てたけどな」

「すごいですよね　その点に関しては真冬　杉崎先輩が大きく見え
ます」

「「真冬^{ちゃん}　それは錯覚だ　鍵に尊敬するなんて末期だぞ」」

「頭がいいのは事実だぞ　深夏に真　まあ真には劣るけど」

「動機が不純なんだよ！　お前が入るなら真のほうがマシだ！」

まあ俺はその逆で鍵を生徒会に入れようと思ったんだけどな

「成績が良かったって言う理由で入れるのはおかしいよ！　そのせ
いで杉崎みたいな問題児が入ってきて」

「生徒会のメンバーを全員メロメロにしたのは悪いと思ってますが
…」

「誰一人なってないわよ！」

「ええ!？」

「なにその新鮮な驚き！ 自信過剰も甚だしいわね」

「そんな…まだ会長しか落ちてなかったなんて…」

「私も落ちてないわよ！ 杉崎なんかより豹堂の方が良いわよ！」

突然俺に話の矛先が向けられる

鍵がこつちを睨んでいる いや 俺にはそういう気持ちないから

「でも俺が一番恐怖するのは会長が最初に言ったことなんですよ
「え？どういうこと？」

「つまらない自分になる つまり今のこの状態を楽しんでいるけど
最終的にはそれが当たり前のように感じてしまうと思うと…」

「たしかにそれはあるよな」

「あー それは分かるかも 家が経営者だから生活基準を高くした
らなかなか下げられないよね」

「なるほど それで会長は美少年をはべらせるのが趣味になったと」

「前々から俺にネットを使って調べさせたのもそのためだったん
ですね？」

「ないわよ！そんな趣味！ あと豹堂！あんたが言うとしやれにな
らないからやめなさい！」

「さらには札束で人の顔をペチペチ叩くのがやめられないと…」

「いまではこの碧陽学園に『桜野くりむ 被害者の会』が設立され
たとかされてないとか…」

「どんな貴族よ私！そこまでのスケールじゃないから！」

「貧乏な今では家に侵入してくるアリの足を一本一本もぐるのが唯一
の生き甲斐と」

「他にもミミズや昆虫を虫眼鏡で焼くのもよくやっているか」

「ただの根暗じゃないのそんなの！」

口論では会長は体力が低いから口論では鍵や俺には勝てない

やっぱり会長弄りは楽しいな

「真冬も…そうはなりたくないですね でもどうすればそうなるんでしょうか？」

「どうなんだろうね 世の中で勝ち組って言われている人たちは何か自分の中でやりたいことを見つけてそこその人生を送っているんだろうな」

「そこそこ幸せ…ねえ 駄目だな」

「ん？ どうした？」

鍵がつぶやいたことに俺が反応する

それにつられて会長や知弦先輩達も鍵を見つめる

「俺は ハーレムエンドを目指す！」

そう鍵が高らかに宣言する

俺はそんな鍵をじっと見つめる

俺以外のメンバーは鍵の言葉に呆れている

「妥協はしても 高い位置で妥協してやる！ 美少女をはべらせて『美少女にはもう飽きたな』って言えるまで上ってから妥協してやる！」

「まあ 目標を持つのはいいことだよな」

「ああ そのスタンスは悪くないよな」

「そうですね 何も考えず上に上るのはいいことですよね」

知弦先輩は言葉を出さず 鍵に対して微笑んでいる

生徒会のメンバーが次々に鍵の発言に賛同する

ただ一人 会長だけが

「えー 疲れるのはいやだよ…」

と発言する

この人は ほんとに駄目人間だな 他のメンバーも呆れている

「じゃ 今日の会議はここでしゅーりよー」

ここで会長が飽きたのか 会議を終了させる
そしてすぐさま鍵にアイコンタクトを送る

さあ 俺たちの仕事の始まりだ

駄弁る生徒会？（後書き）

どう（ry

真「長いわ！ どんだけ伸ばしてるんだよ！」

いいや 区切りがいい部分まで書いてたらこんなに長くなっちゃった
真「なんだよそれ……」

ま まあ次話は駄弁る生徒会の終盤だから

真「あんまし関係なくね？」

さいですか

今回の投稿で今年最後……というよりもう今日で今年も終わりですね
皆さん

作&p:真「よいお年を！」

来年も早めに投稿したいと思いますので来年もよろしく願いします
それでは

駄弁る生徒会？（前書き）

皆さん！

あけてまして！

オメデトウございます！

今年もノロノロですが 更新頑張って生きたいと思ひます！

それでは駄弁る生徒会？ 始めていきます

駄弁る生徒会？

知弦 side

「…で 杉崎と豹堂はまた生徒会室に残ってるんだ」

アカちゃんが生徒会室を眺めながらそうつぶやく
あ 今はニユー君じゃなくて私 紅葉知弦が語り部をさせてもらうわ
その言葉に対し深夏が首を鳴らしながら応答する

「だから対応に困るんだよな あたし達と話すために生徒会の雑務
を全部引き受けてるんだもんね 真が手伝っているのもいまいち理
解できないけど」

「ま 真冬は杉崎先輩のこと嫌いじゃないですよ？」

真冬ちゃんがゲーム画面から目を離して深夏の言葉に反応する

「この学校であいつのこと嫌いなやつなんていないわよ 杉崎はハ
ーレム言わなきゃ彼女くらいできるし 豹堂は何もしなくても彼女
できるわよ」

「あれ？ アカちゃんもしかしてキー君とニユー君のこと…」

「そ そんなことないわよ！」

アカちゃんが顔を真っ赤にしながら反論する

ニユー君の話をした途端に真冬ちゃんが反応したのもちよっと気にな
る

それよりもアカちゃんよ！

ああ…アカちゃんのあの顔いいわあ…

「まあ あいつはなんだかってうちの大黒柱なのかもね」

「でも会長さん 杉崎先輩と付き合ってあげないんですね」

「それとこれとは別よ あいつは甲斐性なしの上に浮気性のやつと…」

まあ そこもキー君のいいところと言えるわね
って…あら？真冬ちゃんがずっと画面を見つめている

「真冬ちゃん？ さっきからずっと何を見つめてるの？」

「え？！ いいえ なんでもないですよ！？」

「これって…真のパートナーカード？」

「ちよっとお姉ちゃん！」

深夏が真冬ちゃんのゲーム画面を覗き見る…まさか

そう思い 目を細めつつ真冬ちゃんに問いただす

「真冬ちゃん もしかして…ニュー君のことが好きになったの？」

「！？／／／そ そんなわけないじゃないですか／／／」

見るからに動揺している真冬ちゃん これは…将来的にまずいわね
まあ ニュー君は譲らないけどね

そう考えながら私達は学園から離れていった…

side out

カリカリカリ…ペッタン

俺と鍵が書類に目を通し必要事項を記載 承認印を押す
そんな音がさきほどから生徒会室に響いている

「なあ真」

「うん？ どうした鍵」

今の今まで作業に集中していた鍵が俺に話しかける

「別にお前も残って作業を手伝うことないんだぜ？ 実家の手伝いもあるんだろ？」

なんだそんなことか？

「いいさ 俺が好き勝手やってるだけだし それに…」
書類を机において笑みを浮かべながら口を開く

「前にも言っただろ？ 一人で抱えるな 今のお前は一人じゃないってな」

一瞬鍵がポカンとした表情をする

しかしすぐに顔を綻ばせ こちらに笑いかけてくる

「ああ そうだったな！ 俺がミスしたらお前がフォローしてくれるもん！」

「え？ そこに関しては限度があるぜ？」

「な？！ おいおい それは酷くないか？」

お互いに笑いあいながら 「冗談を言いながら作業を再び開始する

こんな日常が俺は大好きだ こんな生活をこれからも続けていきたい

碧陽学園生徒会 ここはつまらない人間達が毎日笑いあう幸せな空間である

駄弁る生徒会？（後書き）

今年初の投稿です！

真「今回短いな…なんでだ？」

実は投稿の前にチューハイ3缶あけちゃ（グチャ！）

真「この駄作者が…まじめにやれ！」

まじですいませんした

真「とりあえず今回で『駄弁る』は終了か…」

だね 次回からは『放送する』をしていこうかな

真「ああ あの力オス回か」

まあそういうな 絶対楽しいから

次回も早めに投稿しますのでよろしくです
それでは

放送する生徒会？（前書き）

意外と速く書きあげりましたので投稿します

それと実は読者様に相談がございます

もしよろしかったら活動報告のほうを見ていただいたらなと思います
申し訳ございませんがよろしくお願いいたします

それでは「放送する生徒会」始めていききたいと思います

放送する生徒会？

「他人との触れ合いやぶつかり合いが あってこそ人は成長していくのよ！」

会長がいつものように小さい胸を張って言葉を発する
しかし今はそんなことにかまっている暇はない！

「ちよつと真先輩！やっぱリグ カスは卑怯ですよ！」

「そつちのス フリもだろ！フルバーストは避けきれないんだよ！」

「ちよつと！そこのゲーオタ二人！ きちんと話を聞きなさい！」

今日は趣向を変えて真冬ちゃんとガ ダムの格ゲーをしていた

俺の選んだのはグフ スタム 1000コスでは最強ともいえる
スペックを持つ機体だ

真冬ちゃんはストラ クフリーダム 3000コス故の高火力の機体
会長に言われたので渋々終了して会議に集中する

「それで？ 今日の言葉はどういう意味ですか？」

「あ ゲームしても話は聞いてたのね」

まあ一部は聞き逃してましたけどね

俺の言葉を聞いて会長がホワイトボードに文字を書き始める
書き終わってホワイトボードを バンツ！ っと叩く

「これよ！」

「えーっと…ラジオ放送？」

え？ どういうこと？ いまいち理解できないんだけど

見ると鍵や椎名姉妹　さらには知弦先輩さえポカンとした表情をしている

そんな中真冬ちゃんが一番最初に口を開く

「ら　ラジオって…音楽をかけたり喋ったりする　あのラジオですか？」

「そう　そのラジオよ」

「会長　なんでいきなりラジオなんですか？そういうのは生徒会ではなく放送部の仕事でしょ？」

俺が至極当然の事を会長に対して発する
他のメンバーも俺の言葉に対しうなづく

「何を言ってるの！　生徒会って言うのは生徒をまとめる立場にあるのよ？政見放送みたいなのもたまにはやらないといけないわ！」

「政見放送なんてよく知ってましたね　意外です」

俺と同じ考えだったのか知弦先輩が会長の頭を撫でて満足そうな顔をしていた

撫でられて会長は顔を緩ませるが何かに気づいて知弦先輩の手から抜け出す

「子供扱いしないで！政見放送くらいしってるわ！」

「そうだったわね　ごめんなさいアカちゃん」

「分かればいいのよ　分かれば」

頬を膨らませながら怒る会長　なんだか頬いっぱい種を詰め込んだハムスターを思い出した

何か視線を感じたのでそちらを見ると知弦先輩がアイコンタクトを送ってきた…なるほど

「ところで知弦先輩 昨日のあのクイズ番組見ました？ 面白かったですよ」

「そうね 流石は高視聴率というべきかしら…そういえばその番組で政見放送の問題が出てた気が…」

「……………と とにかく政見放送よ！」

滝のように汗を流しながら続けようとする

昨日のクイズ番組に影響されたなこりゃ

まあこの状態の会長は止められない

鍵もやれやれという感じであきらめている感じだ

深夏も嘆息混じりで話し出す

「まあ四の五の言ってもどうせやるんだろ？でもなんでラジオなんだ？ 映像のほうが簡単じゃねーのか？」

「当初はその予定だったんだけど 放送部に言ったら『今渡せるのはこれくらいしか…』って言われたからラジオなの」

そう言いつつ会長が珍しくてきばきと準備をしていく

しかし配線関係は放送部にやらせていたようでマイクスタンドを俺たちの前に設置していく

なるほど ここにくる前に同じクラスの放送部員の女子に「頑張っで」と言われた理由が分かったよ…

本当にお疲れ様です放送部員 今度放送部に顔を出しに行こうかな…
…まったく関係ないけどその事を言いに来た女子が顔を赤らめていたのは何でだろう？

「か 完璧に準備されちゃってます…」

真冬ちゃんがゲームをしていた時とは正反対にテンションがガタ落

ちしてた

まあ 目立つのがそこまで好きじゃない子だからなあ…よし

「大丈夫だよ 真冬ちゃん」

「ふえ？ な 何が大丈夫なんですか？真先輩」

「そんなに緊張しなくてもみんな素人だし もしうまくいなくても俺や皆がフォローするから」

「あ ありがとうございます／＼」

顔を少し俯けながら返事をする真冬ちゃん これで少しは緊張がほぐれると良いな

ふと視線を感じたのでその方向見る…知弦先輩が鋭い目つきでこちらを見ていた…俺なんかした！？

「ほら最近では声優さんのラジオが増えてるでしょ？ 私達のような美少女達がラジオをすればリスナーも喜ぶはずよ！」

「いや それは声優さんだからこそじゃ…」

「それに声優さんやリスナーの皆さんを舐めすぎでしょ…」

俺と鍵が正論でつつこむ…というより鍵 お前今日初めて喋ったぞしかし会長はこのまま企画を押し通すようだ

「可愛い声でキャピキャピ話していればその辺の男性リスナーなんてコロリよ」

「謝れ！ 俺と真以外の男性に謝れ」

「……いや お前（キー君）（杉崎先輩）（鍵）と俺（ニュー君）（真先輩）（真）を一緒にするな（しないの）（しないでください）（するなよ）……」

「まさかの一斉射撃！？酷い！真はこの前リ バスのラジオ聞いて楽しんでたじゃないか！」

いや あれは声優さんのネタを楽しむラジオだろ 鍵と違ってまじめに聞いてたぜ？俺は

「杉崎は騙されるのね…まあ6人もいればネタは尽きるようなことは無いだろうし大丈夫 いつもどおりに話せば」

「いつも通り…ねえ」

「杉崎は喋らないでね 杉崎の発言すべてが放送コードに引っかかるから」

「ひでえ！」

「あ 豹堂は積極的に喋ってね？ あんたの言動がこのラジオを左右するといっても過言ではないわ」

「？ 別に俺が喋ろうが喋るまいがラジオには関係ない気がするんですが…」

（（あ そういえば本人は自分の人気を知らないんだった））

真冬ちゃん以外のメンバーがあきれたように俺の顔を見る なぜ？

まあ鍵が規制されるのは仕方が無いな いつも発言があれだし…

正直俺も付いていけない時あるし

そんなことを考えていると会長が俺の近くに来て耳元に話しかけてきた

…え それをやれと？ うわ 顔がまじだ はあ…怒られても知らないって

「ん？真 急にパソコンを開いてどうした？」

「いや これから全国の放送局を電波ジャックしてこの放送を全国に流そうかと」

「…何しようとしてんの（るんだ）（るの）（るんです）！？」

「…」

「お前どうしたんだ！？正気を取り戻せ！」

「いや 会長がそうしろって…」

俺がそうだった瞬間全員が会長を睨む… まあ本気ではなかったんだろ？ 多分

「なに？ 皆 私が放送するラジオなんだから世界に知らしめる必要が」

「……ないです（ないわ）（ねーな）」「……」

「うわああああああああああん」

あ ガチ泣きだこれ

そんなこんなで会長を知弦先輩が泣き止ませてラジオを始めようとする

ちなみにこれは生ではなく録音らしい それならまだトラブルがあつても編集が出来るんで何とかなるだろう

じゃあ何で電波ジャックしようとしたんだよ 生放送じゃないのに まあみんな落ち着いてラジオの準備を始めていた

真冬ちゃんは諦め半分 興味半分でマイクを突いている なんか癒されるな

知弦先輩は… あの人「コホン」とかいって喉の調子確認してるよ やることはすべて手を抜かない人だからな

深夏はいつも通りだな クラスでも代表として色々喋っていたりするからな 慣れたものなんだろう

鍵は… 喋れないからって若干不貞腐れてる まあ… 元気出せよ

俺？ PCで録音データとかのチェックをしたりしているよ まあ なんだかんだで面白そうだし

そうして皆が準備が終わったのを確認した会長が口を開く

「さあ！始めるわよ！」

そう言い会長が手元に何種類もあったボタンの一つを押してラジオ放送が始まった

放送する生徒会？（後書き）

今回は本格的にラジオが始まる直前までです

真「なんで会長は俺にハッキングなんて…」

そらお前がハッカーまがいのことが出来るからだろ

真「え!？」

お前のプロフィールのPCいじりはそこまで行っていた　という事だよ

真「いやいや　俺そんなことしないから!」

ならなんで断らなかった？

真「お前がそう書いたからだろ!」

まあ落ち着け!　って何小さく前ならえしてるの？

ねえ!　ちよつと待って!　俺にも慈悲を!

真「うるせえ!　今日こそ俺の堪忍袋の緒が切れた!　くらえ!」

え!？　ちよつとまって「無　子!!!」　ぐああああああ

ドガアアアアアアアアアン!!!!!!

真「ハア…ハア…ハア…今日はここまです　また次話でお会いしましょう　それでは」

放送する生徒会？（前書き）

まさかの連続投稿

これが新年年明けの力だというのは…

活動報告にコメントを下さった方々ありがとうございます

そのことを参考に「怪談する生徒会」は書かないことにいたしました
「怪談する生徒会」を期待していた方には申し訳ないと思います

てなわけで「放送する生徒会？」始めて行こうと思います

今回では真面目で冷静な（はず？）真が軽くボケ要員になっていま
す（笑）

それと今回は台詞の前に名前が書いてありますが『真』と書くとき
と真冬の区別が付かないので真は『豹』と表記することをお先にお
話しておきます

放送する生徒会？

会「桜野くりむの！オールナイト全時空！」

杉「放送範囲でけえ！」

豹「とうとう時空をも超えたよこのお子様会長！」

生徒会の一存OP 「T r e a s u r e」

会「さあ始まりました桜野くりむのオールナイト全時空」

知「夜じゃないけどね」

豹「放課後の夕方ですよね 今」

会「この放送は富士見書房の 一社提供でお送りいたします」

深「どうしたんだ富士見書房：無駄な投資も甚だしいな おい」

会「まあギャラは0円の上に機材はこっちのものを使っているから
スポンサーしてもらうことは何も無いんだけどね」

真「ならなんでスポンサーを読み上げたんですか？」

会「雰囲気よ 雰囲気 うん今のところとってもラジオっぽいわ」

真「はあ…なら良いんですけど…」

会「こら真冬ちゃん！ そんな低いテンションじゃだめよ！ リス
ナーはもつと女子の明るい会話を望んでるんだから！」

真「そうでしょうか…」

会「うん 男子リスナーなんてそんなもんよ」

杉「こらこらこら なんでリスナーを見下げた発言するの！？生徒
に喧嘩売ってるんですか！？」

会「パーソナリティあつてのリスナーでしょ？」

杉「リスナーあつてのパーソナリティでしょ！」

深「おお！ 鍵がまともな事言ってる！ ラジオ効果すげえ！」

豹「…でもよく考えてみるとリスナーはパーソナリティがいない放
送では存在できない さらにパーソナリティもリスナーがいなけれ

ば放送では存在できない　つまりリスナーとパーソナリティは表裏一体というわけで……」

真「そして真先輩が本編で使わなかった頭をフルに使ってます！真先輩帰ってきてください！」

会「そうよね…私が間違っていたわ杉崎……」

杉「分かれば良いですよ…分かれば……」

会「やつぱり　ある程度は媚びておかないといけないわよね　うん　私とっても大人ね」

杉「だからそういう発言が駄目だつて」

会「お便りのコーナー」

杉「無視！？　ラジオなのに　言葉のキャッチボールは無視！？」

知「それがアカちゃんクオリティ」

豹「会長にまともな返答を期待しちゃ駄目だろ」

杉「なんで知弦さんと真は所々でしか喋らないの！？あんたらが一番舵取りしないといけない人たちでしょ！？」

知・豹「……………」

杉「ラジオでの無言はやめましょうよ！」

会「さて一通目のおたよりは」

杉「進行重視か！会話の流れは無視ですか！」

会「『生徒会の皆さんこんばつぱー！』はいこんばつぱー！」

杉「え何その恥ずかしい挨拶！恒例なの！？」

杉崎以外「こんばつぱー！」

杉「俺以外の共通認識！？　唯一俺と同類の真まで！」

豹「え？この挨拶は当たり前だろ？」

会「『桜野くりむのオールナイト全時空いつも楽しく聴かせていただいております』ありがとねー」

杉「嘘だ！　これは第一回放送のはずだ」

豹「時系列なんてこの放送には些細なことだぜ？鍵」

杉「流石は『全時空』！」

会「あ　あと言い忘れてたけどこれ一応生でも放送されているわよ

まあ今聴いてる人は少ないだろうから足下のお昼にも放送するけど」

杉「どうりでメールが来るはずだ！ ていうよりそれだったらより一層発言に気をつけてくださいよ！」

会「はいはい　じゃメールの続きね」ところで皆さんに質問なんです皆さんはどんな告白をされたら嬉しいでしょうか？僕は好きな人がいてどんな告白をしようか悩んでいます　くりねえ是非アドバイスをお願いします」

杉「『くりねえ』って呼ばれてるんだ！こんなにロリのくせに！」

会「そうねえ…これは難しい問題ね　でも恋愛経験豊富な私から言わせれば」

杉「男と手を繋いだことも無いくせに…」

会「む　あるよ！　男と手を繋いだことくらい！」

杉「誰だ！俺のハーレムメンバーに手え出したのは！　出て来い！俺がじきじきに修正してや」

豹「あ　それ俺だ　去年くらいに迷子になってた会長の手を引いて家まで送った記憶が…」

会「そ　そんなことまで思い出さなくても良いわよ！それよりもこのお便りへの回答だけど…ふっ…に告白すればいいと思う」

杉「なんか適当にアドバイスしたああああああああ！」

会「知弦はどう思う？」

知「そうね…好きにすれば良いじゃないかしら　私には関係ないし」杉「パーソナリティがリスナーに冷てええええええええええ！」

会「真冬ちゃんはどう？」

真「え？　そ　そうですね…真冬は…あの…分かりません」

杉「まさかの『分かりません』発言キタアアアアアアアアアアアアアアアア！」

会「深夏は？」

深「当たって砕ける！以上！」

杉「もつとりスナーの心を丁寧に扱おうよ！」

会「うんうん 最後に豹堂！」

豹「すいません 俺はそういう経験したことが無いんでノーコメントで」

杉「唯一の良心がああああああああ！」

会「杉崎うつさい…さて 次のお便りは『妹は預かった 返してほしくば指定した銀行の口座に…』ってあれ？ これ間違いメールね ちよつとスタッフーちゃんと確認してよねーまったく」

杉「スルーなの！？ そんな重要そうなメールスルーしちゃっていいの！？」

真「それとスタッフなんてこの放送にはいない気がするんですが…」

会「『生徒会の皆さんこんばつぱー』こんばつぱー！」

杉崎以外「こんばつぱー！」

杉「だからなんで皆ノるの！？ 真もさらつと乗っかってるし！」

会「『くりねえ どうしよう 私お金が早急に必要で…』というのも妹が誘拐されてしまつて…両親も金策を練っているんだけどなかなか集まらなくて…どうしたらいいでしょうか」

杉「デーブなお悩みきたあああああああ！つかこのメールの前に110番しろよ！それにこれさっきのメールに関係してるだろ絶対！」

会「ううんどうしょ…よし！ラジオネーム『被害者の家族』さんには富士見書房と豹堂のポケットマネーから『まとまったお金』をお送りしまーす」

杉「用意しちゃうんだ！ しかもスポンサーから勝手に！さらには真からも…って真？ 急にPCが壊れるくらいにタイピングを始めてどうした？」

豹「ん？ いやなに まとまったお金を準備するために政府のトップの口座の金を俺のに書き換えようかと」

杉「やめろ！ そんな犯罪レベルな事をしようとするんじゃない！」

豹「人質の命には変えられないだろうが！」

杉「急に正論を述べるんじゃない！」

会「よしそれではここで1曲 先日リリースされたニューシングル
《妹はもう帰ってこない》です それではどうぞ」
杉「空気よめよおおおおおおおおお」

妹はもう帰ってこない FULL再生

放送する生徒会？（後書き）

今回はここで終了です

真「…チツ生きていたか」

ちよつと！？なにその物騒な言い方！

真「てか終わりがこれかよ…」

まあいい区切り方が思いつかなかったから

真「……………」

？ どうした？

真「…いや なんでもない」

そうか？ ならいいんだけど

さて 「放送する生徒会」はもう2話ほど続きますなるべく速く書き上げたいと思いますので今後もよろしくお願いいたします
それでは

放送する生徒会？（前書き）

遅くなってすいません！

休みも終盤の上にバイトで忙しくてなかなか書けませんでした
そしてこの話：オリ主が挟みにくい！

そのためクオリティは今回かなり低いです

それと後書きにアンケート？みたいな事を書いていますのでぜひ
てなわけで放送する生徒会？ 始めていきます

あと1万PV突破してました！
皆さん本当にありがとうございます！

放送する生徒会？

会「さて聴いていただいたのは現在発売中の《妹はもう帰ってこない》でした 1st シングルの《弟は白骨化していた》も合わせてよろしくね」

杉「あんたの過去にいったい何があったんだ！」

真「妹である真冬には耐え難い曲でした…」

豹「……妹…か」

会「？ あれ？どうしたの豹堂 暗い顔しちゃって」

豹「え！？ あ なんでもないですよ 続けちゃってください」

会「そう？ じゃあここで恒例のコーナー 《椎名姉妹の 姉妹でユリユリ》」

杉「……………それはちよつと聴いてみたいかも…」

豹「鍵 後でしばくぞ てかなにやらせようとしてんですか!？」

真「杉崎先輩!？そこはちゃんとツツコンでくださいよ! 少しは真先輩を見習ってください!」

深「そうだ! 聞いてないぞ そんなの!」

会「このコーナーはリスナーから送られた恥ずかしい百合っぽい脚本を椎名姉妹が演じるというこの放送屈指の人気コーナーよ」

杉「人気な設定なんだ…俺が言える立場じゃないけどこの生徒大丈夫か？」

豹「鍵安心しろ お前共々すでに手遅れだ」

杉「ひでえ!」

会「個人的には好きじゃないんだけどね ほらご機嫌取りよ ご機嫌取り これやっておけば生徒も満足するだろし」

杉「だからそういう発言は本番中にしないでください!」

会「じゃ 椎名姉妹よろしくね」 はい これ台本」

真「う うう…本当にやるんですか? 真先輩…」

豹「ご ごめん さつきから会長が『止めるなよ?』って視線送っ

深「うわ　なんだこれ…こんな読んでらねーよ…」

杉「副会長の資格全く関係ないでしょ……これ」

深「……やるしか……ねーようだな」

杉「なんで納得してんの!？」

真「真冬も……覚悟を決めました」

杉「何キツカケ！？　ねえ！　何キツカケ！？」

知「ふふ…それでこそ椎名姉妹よ」

杉「あんたはなんで急に思い出したかのように発言するの!？」

豹「深夏に真冬ちゃん…大きくなって…」

杉「なんでお前はお前で泣いてるの！？ お前一人の父親か！？」
会「それじゃ　いつてみよー」

『真冬……あたしもう……』

「ああ
おねえちゃん…
んっ
ああ
はあはあ」

『真冬…可愛いよ 真冬…』

「おねえ……ちや……
……んん！」

杉「待て待て待て待て待て！ 個人的にはドキドキワクワクだけど

これは校内放送でやっていいレベルじゃないでしょ!？」

会「うん そ そうね これはなんかやりすぎたわ…」

真「ええええええええ！？ここれだけやらせておいて！」

深「ひでえ！　そういう反応されるとあたし達本格的にいたたまれ

ねーじゃねーか！」

[illegible]

知「あら？ ニュー君が顔を真っ赤にして思考停止しているわね

それよりも 椎名姉妹の絡みは放送コードに引つかかるわね そう
いうディープなのはプライベートだけで留めてもらえないかしら？」
深「勘違いされるような事言つなよ！ プライベートはこんなんじゃ
ねー！」

真「そうです！ リスナーの皆さんは信じないくださいね！」

知「…そうね ここではそういうことにしておくべきだったわね
軽率な発言してごめんなさいね 二人とも」

椎名姉妹「もうやめてええええええええ！」

会「さ さあ次のコーナー《杉崎鍵の『殴るなら俺を殴れ！』》」
杉「なんですかそのコーナー！」

会「このコーナーは校内でもし誰かを殴り飛ばそうくらいカツと
してしまつたらとりあえず杉崎を標的に発散しよう というコーナ
ーです」

杉「俺の人権は！？」

会「生徒のいざごさを解決するのも生徒会の仕事 というわけで今
日も揉め事がありましたら2年B組の杉崎までご連絡を」

杉「するなああああああああああ」

会「仕方ないわねえ…希望者もないようだし今日はこのコーナー
飛ばすわ」

杉「なんで俺の担当だけそんなコーナーなんですか…」

会「それじゃ今度は《豹堂真の『紳士にお悩み相談』》のコーナー」

杉「何この俺との差！ おんなじ男なのに！」

会「このコーナーはリスナーさんから送られた相談事に豹堂が紳士
に答えるコーナーよ」

杉「…というより ものすごい普通のコーナーですね」

会「うん 杉崎と違って豹堂は真面目だからね」

杉「そういう理由なんだ！ 俺と真の扱いの差！」

豹「／／／ハッ！ あ あれ？ 俺何してたっけ？」

会「お 豹堂起きた？これから豹堂のコーナーだから はいこれお
便り」

豹「え あ はい分かりました えーと…2年B組の放送部員さんからのお便り…ってうちのクラスじゃん」

杉「なんでうちのクラスからも参加してるんだよ…」

深「というか わかりやすい名前だなおい」

豹「まあとりあえず読むな『生徒会の皆さんこんばつぱー』 はいこんばつぱー」

杉「なんか異様にお前なれてないか？」

豹「気にしない気にしない 『実は私は同じクラスに好きな人がいるんですがその人は鈍感でさらに私は口下手で彼とうまくしゃべることが出来ません どうすればいいでしょうか？』…鈍感なやつねえ…一体誰だろうな その彼って」

杉（鈍感なやつが好き…その彼って絶対真だよな？）

深（ああ 絶対真のことが好きだな このリスナー…でもこいつの鈍感はどうがいないからなあ…）

豹「ん？ 二人ともどうした？」

杉&深『いや なんでもないぞ？』

会「それよりも豹堂！ リスナーさんの質問に答えないと！」

豹「あ そうでしたね うーん…とりあえずわその彼ときちんと話してみよう そして面と向かって喋れる様になったら告白しちゃおう その恋を俺は応援するよ！」

杉&深（自分自身のことなのに応援しちゃったよ！）

会「うんうん やっぱり豹堂がコーナーすると安心ね！この調子で次のコーナー！」

杉「え！？ あれだけでいいんですか？！」

会「次は私と豹堂のコーナー！《桜野くりむと豹堂真へのファンレター》！」

杉「明らかに差別してね！？ コーナーの格差が激しいですよね！？ 真なんか個人のコーナー二つ目ですよ！？」

豹「俺これに関しては全く聞いてないんですけど…てか俺なんかファンレターなんて来ないでしょ」

会「憧れの部長さんからのお使い 『豹堂真様：前にあたしに対し親身な態度で助言をくれたあなた 今ではあたしのかけがえの無い存在となっております お話したいことがございますので後日 陸上部の部室までおこしください』」

会長＆真以外『これファンレターじゃなくてラブレターだああああああああああ』

杉「お前何？！陸上部の誰かになんか助言言つてたの！？」

真「真先輩！ ちょっと詳しく教えてください！」

豹「詳しくって言われても… あ そういえば前に陸上部の部長からマネージャーにならないかって誘われてたな… その事かな？」

深「…最近陸上部の部長がよく真に絡んでくる理由はこれか」

会「それじゃ…次のお便りいくよ… 匿名希望さんからのお使い『桜野くりむ様 貴女の可愛らしさを見るたび僕の心はドキドキとときめいて』」

杉「またラブレターか！ てか放送を利用して俺の女にちよつかいかけたやつは！ いい度胸だ出て来い！ 俺が相手して げふっ」

会「な なにを口走ってるのよあんたは！」

杉「だ だって 俺の彼女にラブレターなんて送ってくるやつがいるから…」

会「私は杉崎の彼女じゃないから！ ラジオでそんなへんな事言わないの！」

杉「すいません カッとなってやりました 反省はしていません」

会「なんでそんなふてぶてしいの！？ きちんと反省しなさい！」

杉「反省してまゝす」

会「あんたはこのスノボ選手よ！」

杉「うう…でもこの会長への手紙のコーナーは俺が嫉妬に狂ってしまっんで耐えられません」

会「う……」

深「どうでも良いけどイチャついてないで早く進めろよ」

会「い イチャついてなんかいいわよ！ 深夏までへんな事言わな

いで！豹堂はなに温かい目で見てるのよ！」

豹「いえゝ なんでもないですよゝ」

会「もう…二人のせいで調子が狂ったわ 次のコーナーいくわよ」

真「あ なんだかんだ言つて杉崎先輩の要望どおり手紙読むのやめてくれるんですね」

会「うう…と とにかく次！ 《学園 五・七・五》」

豹「なんかさっきの俺のコーナー並みの定番コーナーが来ましたね」

会「うん ネット切れだから」

杉「言っちゃうんだ！そんな大事なこと放送内で言っちゃうんだ！」

会「このコーナーはリスナーの考えてくれたこの学園にまつわる面白おかしいことを五・七・五にして紹介するコーナーです」

豹「普通すぎてなんだか怖いな」

杉「だよな 逆に危機感を抱くほどありきたりなコーナーだよなこれ」

会「こほん それでは参りましょう 匿名希望さんの五・七・五」

『燃えちまえ メラメラ燃えろ 杉崎家』

会「……す 素晴らしい詩ですね 情景が目浮かぶようです」

杉「……………」

会「？えつと…杉崎？ 私が言うのもなんだけど…突っ込まないの？」

杉「いえ……すいません リアルで身の危険を感じてテンションが上がらないです」

会「あー……………」

深「まあ…笑いのレベルを超えてたよな これは」

真「真冬も若干引いてしまいました」

知「まあ でもそうよね キー君ってそういう立場よね基本 皆の憧れの美少女の集まるコミュニティに在籍しているだけならまだしも 自分で『攻略する』『ハーレム』だの言っているから…自業自

得？」

豹「知弦先輩の意見には一理あるかな？　まあ『限度を考慮よ？』
つていう警告じゃないのか？これ」

杉「うう…ええい！　構うもんか！　ここは俺のハーレムだ！　文
句あるやつ出て来い！　一人ひとり話し聞くと喧嘩も買っぜ！　だ
から」

会「だから？」

杉「火　つけるのだけは勘弁してください　まじですいませんでし
た」

会「…杉崎がラジオなのに泣きながら土下座したところで次のお便
り…これも匿名希望さんから」

『金が無い　勢いあまって　人さらい』

杉「犯人こいつだあああああああああああああああ」

会「え？　なにが？　どういうこと？」

杉「いや　さっきの誘拐事件の…そんなことよりこいつの名前と住
所！　書いてないんですか！？」

会「それはないけど追伸の部分に『二万円も要求してやったZ.E』
とは書いてあるわ」

杉「やつす！　二万かようちの生徒の妹の身代金！　なんで両親用
意できなかったんだよ！」

会「私に言われても困るんだけど…　杉崎　世の中には恵まれ
ない人たちもたくさんいるんだよ」

杉「そ　それはそうですね…　なんかこの事件　割と浅い気がして
きました」

会「そんなの誰もが最初から気づいてた事じゃないの　まあ私達は
ラジオを続けましょう」

杉「収録中…てか放送中に決着つきそうですね 誘拐事件」
会「では 最後の五・七・五です」

『真面目にさ 仕事をしろよ 生徒会』

杉「一般生徒の素直な反応来ちゃったあああああああああああああああ
あああ！」

会「まったく失礼しちゃうわよね」

杉「いや…俺が言うのもあれですが すげえ気持ち分かります」

深「あたしも分かる」

真「真冬も分かります」

会「なによ！やるべきことはちゃんとやっているわよ！」

知「やらなくて良いことも大量にやっているけどね」

豹「今やっているこれだつてやらなくてもいいことですもんね」

会「不愉快だわ！ このコーナー終了！」

杉「そういう態度が駄目なんだと思います！」

会「それじゃ 終わりの近いからフリートークでもやろうか」

豹「今までが十分フリーダムでしたけどね」

深「ん？ 会長さん メールが来てるみたいだぜ」

会「え？ なになに？」

真「ええと ですね 『妹が誘拐されていた件ですが無事解決いたしました』 良かったですね！」

杉「おお 解決したか 良かった 良かった」

知「……チッ」

杉「今の舌打ちおもいつきり聞こえてますよ知弦さん」

知「なんのことかしら？」

杉「録音&放送されているっていうのになにその開き直り！」

豹「…書き換えたのをまた直しとこつと」

杉「お前はまじでなにやってたの！？」

知「でも随分とあっさり解決したわね どんな犯人だったのかしら

?

真「ええと　よくは分からないんですけど　最終的には攫われていた妹が自分で犯人を叩きのめしたそうです　犯人は：重症だそうです」

杉「二万円ほしかっただけの犯にいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいん！」

真「妹さんも基本は遊んで貰っていただけらしいです　でも偶然このラジオを聞いて自分が攫われたことに気づいて犯人をボコボコしたそうです……」

杉「俺たちのせいなのか！」

深「結局この犯人はなんで二万円がほしかったんだ……」

真「えとですね・・・メールによると犯人は意識を失う前に『この子の姉に…貸したままの…二万円を返して…ほしかった…だけなの…』と倒れたそうです」

杉「いたたまねええええええええええ！ てか 諸悪の根源は姉か！ リスナーか！」

真「そのリスナーさんからのメールの最後は『悪は滅びるのよ！あつはつはつは！』で締めくくられてます」

杉「このラジオのリスナーはろくでもねえな！」

豹「このリスナーが異常なだけじゃないか？」

真「ま　まあ一件落着ということで……」

杉「…俺この放送終わったら犯人とこ見舞いに行くわ 助かってくれよ…」

豹「鍵 先に行っておいてくれ 俺メロンとか買ってくるから」

会「え ええと……色々ありましたがこのラジオも そろそろお別れの時間となりました」

杉「やっとか……短い番組の割に驚くほどディープだった……」

会「最後は『今日の知弦占い』でお別れです。それでは皆さんまた来週」

神秘的なBGM

知「それでは今日の知弦占いを 当校の獅子座のあなた 近日中に『世にも奇妙な物語』っぽい事態に巻き込まれるでしょう タリを見かけたら全力で逃げましょう

ラッキーカラーは《殺意の色》 どす黒いか真紅か その辺は各々のイメージにお任せするわ

ラッキーアイテムは《核》 常に持ち歩けるならなおよし 貴方がメタルギアならば それも可能になるでしょう
最後に一言アドバイス

死なないで

以上 知弦占いでした」

杉「怖いですよ！ 獅子座の人間今日が終わるまでビクビクですよ！」

豹「……………」

真「？真先輩？どうしたんですか？顔色悪いですが…」

豹「真冬ちゃん！」

真「きゃ！ な なんですか！？ ハッ！ も もしかして告白ですか！？ そんな 放送中に告白なんて／＼／」

豹「真冬ちゃん…確か今ピース オーカーとオ スもってたよね！

？今日の間貸してくれない！？お願いだから！」

深「………そういえば真って獅子座だったな……」

知「また来週 この時間に会いましょう…獅子座とニュー君以外」

杉「獅子座と真おおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

ED曲 《弟は白骨化していた》

放送する生徒会？（後書き）

真「ちょっと聞いてみたいんだけど」

ん？ どうした？

真「俺の声って誰かイメージＣＶって決めてるのか？」

え？ …… あ 決めてなかった

真「決めとけよ…」

てなわけで読者の皆さんは真の声を脳内再生で誰にしていますか？

個人的には『蒼穹のファフナー HEAVEN AND EARTH

H』の西尾暉役の梶裕貴さんかなと思ってます

「全然違うだろ！」や「この人のほうが…」などのご意見ありましたら感想のほどお願いいたします

放送する生徒会は次回で終わりですがちょっと遅くなるかもしれません

ではまた次回に それでは

放送する生徒会？（前書き）

遅くなって申し訳ありません…その上今回も短いです…
学校始まつたりして忙しいです…

3・4日ごとくらいには頑張つて投稿したいと思いますので…

さて 今回で放送する生徒会ラストです
今回は杉崎が全部喋っております

あ アドバイスや感想もよろしければお願いします…感想があると
やっぱりテンション上がるんで（笑）

それでは放送する生徒会？ 始めていきます

そして近づきつつある完全オリジナル…

放送する生徒会？

杉崎 side

「今日の放送は大好評だったね〜！」

例の番組の放送があった後の放課後

会長は大満足な顔で生徒会室でふんぞり返っていた 知弦さんも楽しそうにニヤニヤしている

しかし…俺や椎名姉妹はすっかりゲンナリしていた
あ そうそう真はどうしたのかって言うと…

「ま 真先輩…大丈夫ですか？ 顔色がものすごい悪いですが…」

「…うん？…あー大丈夫…ただの…寝不足だから…」

「寝不足だけじゃない気が…無理はしないでくださいね？」

「うん…ありがと…優しいね 真冬ちゃん…」

「いいえ 後輩として当然です／＼」

とまあ こんな感じでグロッキー状態になっていた

なんでも昨日あの占いを聞いた後今日学校に来るまでずっとピー

ウォーカーとオ スを最高難易度でノーキルノーアラートプレイを
していたらしい

そのせいで夜も寝ていないみたいで教室に入ってきた時顔色がかなり悪かった

まあ 確かに昨日の占いはかなり怖かったがな…

余談だが真はさっきのように朝からたくさんの生徒に心配されている…？ 割方女子に…羨ましい…

それはそうと会長に聞こえないように小声で深夏と真と会話する

「（なあ…深夏 真… あれ好評だったように見えたか？）」「

「（いや 少なくともうちのクラスではドン引きだったよな）」「

「（あの放送中何回も周りから俺たちに暖かい視線が来てたよな…巡や守とかからも…）」

「（ああ…皆途中で箸を止めたつきり食欲なくして 結局昼飯が食えてなかったな）」

「（会長さんはなにをもって大好評だと思ってんだ？）」「

「（会長や知弦先輩の…クラスメートの先輩に…聞いたら どうやら二人に気を…遣って愛想笑いしていた…らしいぞ？）」「

「（ああ なるほどな…てか ほんとにお前の交友は広いな）」

俺と深夏が真の言葉で納得したところで会長がこちらに視線を向けてきた 俺たちはぎくりと体を強張らせる

「三人のクラスではどうだった？ 皆大絶賛だったでしょ！」

「う……」

そんな純粋な目で見られると…こつ 事実を言い辛い…さすがの深夏もそつと視線を逸らしていた
俺はぎこちなく笑いながら会長に言う

「え ええ…大人気でしたよ」

「そうでしょう！」

いかん ここでつげ上がらせるのもまた問題だ
真も「なんかフォローしろ」と目配せしてくる

「ええ…そうですね 言うなれば職業ランキングにおける『会計事務』と同じくらい大人気でしたよ！」

「それ人気なの！？」

会長は首をかしげていた…よし　なんとか誤魔化したぞ　深夏が「グッジョブ！」と俺を褒め称える

真は2000の特技を持つ男みたいにサムズアップをしていた
しかし会長の矛先はすぐさま真冬ちゃんに向いてしまった

「真冬ちゃんのクラスでも　人気だったよね！」

「え」

真冬ちゃんが蛇に睨まれた蛙のようになる　ああ　彼女のクラスも
うちと一緒に…

真冬ちゃんが困っているのを見かねたのか真が小さなメモに何か書き込んで会長に見えないように真冬ちゃんに渡す
なるほど！　真のことだ　真冬ちゃんを助けるために何か打開策を

「は　はいそうですね…言うなれば　モ　ハンにおけるギギ　ブラ
くらい大人気でしたよ！」

「それは本当に人気といえるの！？　というより私知らないんだけど！」

チヨイスが微妙だ！　何でギギ　ブラチヨイスした！

まあ…真の助言を受けた真冬ちゃんもうまいこと（？）かわしていた…というより　今日は真使い物にならないな

会長はすっかり気が緩んでいるのか「そっかそっかあ」と実に満足げだ……　まずい　なんだかいやな予感が

「じゃあ　第二回もやらないとね！」

『……………』

会長以外全員…今回は知弦さんも含め嘆息する

知弦さんはある程度ノっていたけど それでも 二回 三回とシリ
ーズ化するととなると話は別らしい
とりあえずグロッキー状態の真も含めて全員でアイコンタクト会議
開始

（どうしますか？ 会長まだあれやるつもりですよ？）

（アカちゃんにしては執着が強いわね… 一回やれば満足するとふ
んでいたのだけれど 下手にクラスメイトが気を遣ったことが裏目
に出たわね）

（どうすんだよ… あたし もうあんなの勘弁だぜ？）

（俺も… いやだし 放送部にこれ以上… 迷惑かけるのもまずいだろ
…）

（真冬も… もう無理です…）

全員でうーんと考え込む 会長は一人で上機嫌に次の企画を練って
いた

うちのブレインの真に何か対策を… 駄目だ 今日はいり物にならな
かったんだった

…しょうがないので自分で妥協案を考えて会長に提示してみた

「会長」

「ん？ なあに杉崎」

「その… ですね こういうのは たまーにやるからこそ 有り難味
が出るんじゃないのかなあと」

「？ つまりどういうこと？」

「つ つまりはですね？ 二回目をするとしたらある程度置いてか
らのほうが良いじゃないのかなあ…と」

「……………」

俺の提案に会長が考え込む… その間に俺は視線を皆に向ける

皆俺に向けて親指を立てている…おい真 手がなんか震えてるぞ無理すんな

そう 会長はすぐ別の流行に乗ってしまう人だ ある程度の期間抑えておけばこのような企画忘れてしまう…そう考えたわけだ 会長は数秒間たつぷりと考え込んで…笑顔で答えてきた

「そうね！ このラジオはクオリティ重視だもんね」

「え ええ」

クオリティ…高かったか？あれ

「分かったわ杉崎 次は…うん 一ヶ月は置いて放送しましょう！」
「そ そうですね！」

全員ほつとして胸をなでおろす…よかった…

こうして危険すぎるラジオの第二回放送は少なくとも一ヶ月はやらない事が決定した

これで当分は大丈夫だろう…そうだ 今日我真と真冬ちゃんとモハンでもして気分を

「じゃあ次は生徒会のPRビデオの撮影に入りましょう！ ようやく撮影用の機材が揃ったのよ！」

ドンッ っと机の上に大きなビデオカメラが置かれる……

『え？』

全員が信じられないものを見た もしくは聞いたように固まる 真に至ってはさっき以上に顔色が悪くなっている…

会長だけ…会長が女神のような綺麗な笑顔を向けていた…だがこの

笑顔は…

「さあ…これから本番よ！」

『……………』

『いやあああああああああああああああああああ
あ』

今の俺たちには悪魔の微笑みのようだった

放送する生徒会？（後書き）

真「……………」

お　おーい真　大丈夫かー？

真「……………」か」

ん？なんだ？何かあったか？

真「核ハ…ドコ？」

…トラウマになっちゃってる…まあ次回には直ってるかな？…直つてほしい

それでは次話でお会いしましょう
それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7443z/>

生徒会の切札

2012年1月10日23時50分発行